

プロの技！よみがえった養浩園 ～文化財庭園技能研修会見学記～

国の名勝に指定されるなど、文化財としての価値ある日本庭園を「文化財庭園」といいます。この文化財庭園を維持管理する伝統技術を保持しているのが、文化庁認定の「文化財庭園技術者協議会」（略称「庭技協」）。庭園の地割や石組、池泉、植栽はもちろん、橋や垣根、灯籠などの修理・管理に至るまで、造園者が表現しようとした思想や世界観を理解し整備する、プロフェッショナル庭師の全国組織です。

平成14年の設立以来、技術のさらなる向上と後継者の育成を図るため、毎年文化庁と共催で、各地の庭園を会場とした研修とフォーラムを開催しています。今年度は、本市高部宿にある庭園、養浩園が会場となり、6月8日から16日までの期間で開催されました。



▲大正頃（推定）の養浩園（写真提供／岡山仁家）

「養浩園」とは

「養浩園」は、江戸時代には紙問屋、平成年まで清酒「花の友」を醸造していた岡山家が、水戸の偕楽園を模して明治中頃に整備した面積3,000㎡ほどの回遊式庭園です。往時は遠近の文人が集い、庭の流れで曲水の宴を催すなど風流を極めたそうです。

また、地元の人々が、子供時代に凍結した庭内の池で下駄スケートを楽しんだ思い出を持つ、開かれた庭でもありました。

しかし、酒造業廃業後、家人のみでの広大な庭園の管理は困難で、樹木の生長・繁茂に伴う日照の不足によって樹勢は衰え、枯死も進んで庭園は荒廃。これを憂えた地元住民有志「森と地域の調和を考える会」が整備を始めたことがきっかけとなり、所有者の英断によって、今回の会場提供へとつながりました。

実技技能研修開始！

6月8日（土）午後、九州を除くほぼ全国から、若い女性を含む庭技協の会員ら約30人が続々と養浩園に集合し、我が国を代表する庭園研究者と文化庁調査官とともに、これから6日間整備作業を行う養浩園の状況観察と、整備方針の検討を行いました。

翌日から始まったのは、不要木の伐採と混んだ枝の大胆な剪定、藤づるやつたの除去とともに、大量の土の運び出し。庭には、当初の植栽のほかに実生の草木が繁茂していて、また、庭の東と南に流れる河川の氾濫によると思われる土砂の流入や、大量の落葉の堆積等によって、長年のうちに庭全体が厚く土に覆われてしまっていたのです。

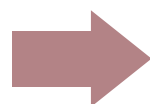
伐採した木や枝葉、大量の土は2トントラック、軽トラ、パッカー車で次々と運び出され、その数は1日数回にも及びました。



▲作業の様子



▲作業前の庭



▲作業後の庭



▲景石の骨格を出す作業を見つめる見学者



▲活発な意見が出されたパネルディスカッション



▲作業に携わった皆さんで記念撮影

作業を進めるうち見事な石組や景石が姿を現し、参加者は興奮気味。するすると高木に登っては、ほれぼれする手際で作業を進め、園地も明るくなっていきました。

6日間の技能研修に参加した庭師は延べ174人。森と地域の調和を考える会会員を中心とする地元住民協力者を加えると、200人を超える人々が作業が進むほどに発見のある養浩園の整備に、和気あいあい楽しく取り組みました。

見学会とシンポジウムの開催

研修最終日の15日（土）、雨にも関わらず100人もの見学者を迎えて実技見学会を開催しました。参加された皆さんは、作業の様子をひとつも漏らさず見ようと、真剣そのものでした。

翌日、市文化センターに会場を移してのシンポジウムでは、「地域との調和が育む文化財庭園」をテーマとした講演やパネルディスカッションが行われ、120人ほどの来場者が、高部に花開いた文人文化を伝える養浩園の価値と、地域ぐるみで地域文化財を磨き継承することでプライドを醸成する必要性など、これからの地域と文化財庭園の関係についての討議に、うなずきながら耳を傾けていました。

プロの技でよみがえった養浩園は、11月9日（土）と10日（日）に開催予定の市内文化財集中曝涼での公開を計画中です。紅葉も見事な養浩園にご期待ください。

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化・スポーツグループ
☎52-1111（内線343）